

専修寺蔵顕智本『浄土和讃』『正像末法和讃』の訓点について

―専修寺蔵親鸞加點『三帖和讃』との比較を通して―

佐々木 勇

一、本稿の目的

1. 専修寺蔵顕智本『浄土和讃』『正像末法和讃』と国宝本『三帖和讃』

親鸞著『三帖和讃』は、浄土真宗の教えを和讃形式にまとめた「浄土和讃」「浄土高僧和讃」「正像末法和讃」の総称である。

三重県津市真宗高田派本山専修寺に、親鸞自筆を交えた本が現存しており、国宝に指定されている。以下、これを国宝本と呼ぶ。

ただし、親鸞の自筆は、「正像末法和讃」の巻頭・各和讃への部分的な書き込み・朱の振り仮名・朱声点に限られる。全文を親鸞が筆写した『三帖和讃』の写本は、現存しない。

親鸞は、まず、「彌陀和讃」一〇八首を作り、その後、「大勢至菩薩和讃」八首を増補した。これらを合わせたものを、いま、「浄土和讃」と呼んでいる。国宝本「浄土和讃」には奥書が無く、現在の形の「浄土和讃」完成時は、不明である。

しかし、「浄土高僧和讃」の末尾に、「已上高僧和讃百十七首／彌陀和讃高僧和讃都合／二百二十五首／寶治第二(一一二四八)戊申歳初月／下旬第一日釋親鸞(七十六歳)／書之畢／見写人者必可唱南无／阿弥陀佛」(一)内は、割書。以下、同じ)と記さ

れており、「浄土和讃」の中核をなす「彌陀和讃」一〇八首は、寶治二年(一一二四八)には、「浄土高僧和讃」と一連のものとして唱えられていたことが知られる。

国宝本「正像末法和讃」には、末尾近くに、「正嘉元年(一一二五七)丁巳^{ヒントノミカヅク}三月一日／愚禿親鸞(八十五歳)書之」と見える。

国宝本には、この後に、五首の和讃が存する。和讃数も少なく、振り仮名・左注が無い和讃も存していることなどから、国宝本「正像末法和讃」は「草稿本」である、と言われている。

この国宝本に次いで古い書写本が、顕智書写本『浄土和讃』『正像末法和讃』である(顕智書写本『浄土高僧和讃』は、伝わらないらしい)。

顕智は、浄土真宗高田派第三世法主である。一一二六年に生まれ、一三一〇年に入滅した。親鸞(一一七二―一二六一)・高田派二世真佛(一二〇七―一二五七)の教えを、直接受けている。

国宝本と顕智本とは、本文の異同が少なからず見られる。この異同は、他の『浄土和讃』『正像末法和讃』書写本と共通するため、顕智独自の改変ではなく、親鸞の推敲の跡をとどめたものと考えられている⁽²⁾。

以下、これを顕智本と呼称する。

この顕智本『浄土和讃』『正像末法和讃』は、近年、『影印高田古典「第二巻」顕智上人集 上』（一九九九年、真宗高田派宗務院）にその全文の影印が収められ、朱筆の判読も可能となった。本稿は、すべてこの影印と解説とに依拠している。学恩に、感謝したい。

2. 本稿の目的

本稿は、専修寺蔵顕智本『浄土和讃』『正像末法和讃』の訓点（振り仮名・声点）の概要を、国宝本との比較により、明らかにするとともに、特に声点について、その実態を報告することを目的とする。

二、専修寺蔵顕智本『浄土和讃』『正像末法和讃』の書誌

顕智本『浄土和讃』『正像末法和讃』には、次の奥書が存する。

「浄土和讃」

草本云

建長七年（乙卯）（一二五五）四月二十六日（写書）之

正應三年（庚寅）（一二八九）九月十六日令書写之畢

「正像末法和讃」

草本云

正嘉二歳（一二五八）九月二十四日

親鸞（八十六歳）

正應三年（庚寅）九月二十五日令書写之畢

表紙には、「浄土和讃 釋顕智」「正像末法和讃 釋顕智」と、書かれており、包紙・包み袋にも、顕智書写本である旨が記され

ている。表紙の文字は、真佛によると見られ、包紙・包み袋の字は、高田派十世法主真慧の筆跡であると推定されている。³⁾本文の字体と表紙書き込みとから、両本は、顕智の書写本であると考えられている。

言われるとおり、他の顕智筆本の字体と等しい、と判断される。本文・訓点とも、奥書の通り、正応の書写・加点と見て、誤りは無かるう。

三、国宝本と顕智本との比較

両本は、和讃の順や、本文に異同が存する。

いま、「讃阿弥陀佛偈和讃」の冒頭二首を比較して掲げる。加 points の声点は、（平）（上）（去）（入）（平濁）（上濁）（去濁）（入濁）などとし、左注は、「左」に続ける。（詳しくは、両複製本を御覧願いたい。）

【国宝本】

一 弥^ミ陀^タ成^{シヤウ}佛^{フツ}ノ コノカタハ

イマニ 十^{ジュウ}入^{ニツ}劫^{コフ}ノ ヲ ヘタマヘリ

法^{ホフ}身^{シン}ノ 光^{クワウ}輪^{リン}キワモナク

世^セノ 盲^{マウ}冥^{メイ}ヲ テラスナリ

〔左メシキノ クラキトナリ〕

二 智^チ慧^ヱノ 光^{クワウ}明^{メイ}ハカリナシ

〔左チハ アレハアレ コレハコレト フンヘチシテ オモヒ ハカラフニ ヨリテ シユイニナツク 〔左エハ コノ オモヒノ サタマリテ トモカクモ ハタラカヌニ ヨリテ フトウニナツク フトウ サムマイナリ〕

有^ウ量^{リヤウ}ノ 諸^{シュ}相^{サウ}コトハ、ク

〔左ウリヤウハ セケンニ アルコトハ ミナ ハカリアルニ ヨリテ ウリヤウト イフ 〔左フチホフハ キヤホトリ ナキニ ヨリテ ムリヤウト イフナリ〕

光^{クワウ} 曉^{ケフ} 上^上 カフラヌ モノハナシ
真^{シン} 實^{シチ} 入^入 導^導 明^{ミヤウ} 上^上 二 歸^{クキ} 命^{ミヤウ} 上^上 セヨ

〔左〕シントイフハ イツワリ ヘツラワヌラ シントイフ シチトイフハ カナラス モノ、ミトナルラ イフナリ

【顕智本】

一 弥^ミ 陀^タ 上^上 成^{シヤウ} 入^入 導^導 佛^{フチ} 入^入 導^導 ノ コノカタハ

イマニ 十^{シフ} 入^入 導^導 劫^{コフ} ヲ ヘタマヘリ

法^{ホフ} 身^{シン} 上^上 光^{クワウ} 輪^{リン} 上^上 キワモナク

世^セ ノ 盲^{マウ} 冥^{ミヤウ} ヲ テラスナリ

〔左〕メシキタリ クラシ

二 智^チ 慧^ヱ ノ 光^{クワウ} 明^{ミヤウ} 上^上 ハカリナシ

〔左〕チハ アレハアレ コレハコレト フンヘチシテ オモヒ ハカラフニ ヨリテ シユイニナツク

〔左〕エハ コノ オモヒノ サタマリテ ニトモカクモ ハタラクカニ ヨリテ フトウニナツク フトウ 三昧ナリ

有^ウ 量^{リヤウ} ノ 諸^{シヨ} 相^{サウ} 上^上 コトハ、ク

〔左〕アリヤウハ セケンニ アルコトハ ミナ ハカリアルニヨリテ ウリヤウト イフ

〔左〕佛法ハ キヤホトリ ナキニ ヨリテ 无^ム 量^{リヤウ} イフナリ

光^{クワウ} 曉^{ケフ} 上^上 カフラヌ モノハナシ

〔左〕ヒカリニテラサルハナリ

真^{シン} 實^{シチ} 入^入 導^導 明^{ミヤウ} 上^上 二 歸^{クキ} 命^{ミヤウ} 上^上 セヨ

〔左〕ワアマタニヨライナリ

〔左〕シントイフハ イツワリ ヘツラワヌラ イフ シチトイフハ カナラス モノ、ミトナルラ イフナリ

1. 本文の異同

両本の和讃掲出順、和讃の総数等についての異同は、先行研究に譲る。

両者一致する右和讃では、キワ（際）・キヤホトリ（際辺）・ヘツラワヌ（詔わぬ）など、歴史的仮名遣いと異なるものが、両

者一致している。また、ホフ（法）・フンヘチ（分別）など、親鸞の字音仮名遣いが両本に共通する。

また、両本とも、親鸞の仮名遣いの特徴として指摘されている、複合助詞「をば・をも」を、「オハ・オモ」と書いている点でも、共通している。⁽⁴⁾

2. 振り仮名の加点数

右に述べた如く、漢字に付された、字音を中心とする両本の振り仮名も、基本的には一致し、両本とも、親鸞の字音仮名遣いに基づいている、と判断される。

しかし、両本には、振り仮名の加点数密度に差が存する。

『正像末法和讃』は、両者本文の異同が大きいため、以下、『浄土和讃』のみの数を示す。

国宝本には、漢数字などの平易な漢字や、既に加点了漢字が再出した場合には、振り仮名が省かれることがある。たとえば、「一」は、国宝本の『浄土和讃』本文に、一九回使用されている。しかし、振り仮名加点数例は、一例も無い。「十」も、国宝本『浄土和讃』本文に出現する全一七例のうち、加点数例は、無い。

これに対して、顕智本『浄土和讃』本文の「一」には、二二例のすべてに、「斗チ」の仮名が振られている。また、「十」にも、全二九例に「シフ」の加点数が見られる。

このように、顕智本は、基本的にすべての漢字に振り仮名を付そうとしたものようである。

この両本の相違は、親鸞の加点数態度の変化とは考えにくい。なぜなら、和讃よりもさらに平易に仏の教えを説いた『一念多

念文意』『唯信抄文意』なども、親鸞自筆本は、顕智本『浄土和讃』に見られるような、稠密な加点ではないからである。

よって、顕智本の振り仮名は、親鸞自筆本の振り仮名を継承した上に、顕智または底本の筆者が増補したものを含む、と考えられる。その増補された振り仮名にも、「一・水・阿・阿」など、「浄土真宗伝承音」と呼ばれることになる、親鸞独自の付音が見られる。

3. 声点

A. 「○」型声点について

顕智本には、「○」の濁声点が見られる。しかし、国宝本には、それが一例も無い。

親鸞は、この「○」型の声点を用いている。この声点を親鸞は、入声において、「清急」「濁急」「清緩」「濁緩」を区別するのに用いた。「急」は「急」はまだ開音節化していなかった舌内入声 t と入声の促音を、「緩」はすでに開音節化していた喉内入声 k・唇内入声 p を示していたことが、坂東本『教行信証』の声点を分析することによって明らかにされた。

なお、この形式の入声点を用いた資料は、限られており、現存の親鸞自筆本では、坂東本『教行信証』の外には、西本願寺蔵『阿弥陀経・観無量壽経註』のみである。

顕智本において、「○」形式の濁声点は、以下の例に加点されている。ここでは、該当漢字の訓点のみ記す。

【喉内入声字・唇内入声字】(用例下(一)内は、所在を複製本の頁数と行数とで示したものを。以下同じ。)

徳―功德(入濁) (二九四・六六一・一三二一・一四六三) 功德(入濁)

聚(入濁) (五六四) 八功德(入濁) 水(入濁) (六一二) 功德(入濁) 蔵(入濁) (六一

4) 恩徳(入濁) (九五一) 徳(入濁) (三三三)

極―无極(入濁) (四八一) 无極(入濁) 尊(入濁) (六二四)

法―勝法(入濁) (八九三) 法(入濁) 喜(入濁) (二六三) 法(入濁) 蔵(入濁) (三四二)

覺―平等覺(入濁) (二一四)

【喉内入声字・唇内入声字以外】

絶―超絶(入濁) (二五一)

脱―解脱(入濁) (二五四)

心―三心(入濁) (二〇三二)

種―種種(入濁) (二八三三)

占―ト占(入濁) 祭祀 (二七四四)

右が、顕智本における「○」形式の声点の全例である。

右例を国宝本と対照させると、国宝本の大部分は濁声点であるため、顕智本の「○」も濁声点であると考えられる。

しかし、坂東本『教行信証』で指摘された入声濁緩の声点とは、一致しない例が多い。

加点例には、喉内入声字・唇内入声字が多いことは確かであるものの、喉内入声字・唇内入声字の大部分には、「○」または「一」の声点が加点されており、顕智本全体では、舌内入声・促音と喉内・唇内入声とを区別しない例が中心をなす。

そして、「○」形式の声点加点例中には、右に掲げた如く、喉内・唇内入声字以外に加点された例が存する。

また、入声清の場合は、「○」点のみであり、「○○」は存し

ない。

このように、顕智本の声点は、入声に急と緩とを区別した、親鸞の他資料における加點法とは異なる。

これらの点から、この声点は、坂東本『教行信証』・西本願寺藏『阿弥陀經・觀無量壽經註』に近い、規範的な加點がなされた原本のそれを引き継いでいる可能性は否定できないものの、顕智または底本の筆者が、親鸞加點本を改変した可能性が高い、と思われる。

B. 声点加點部分

国宝本・顕智本とも、音読した漢字の大部分に声点が加點されている。

ただし、国宝本には声点が加點されながら、顕智本「浄土和讃」には声点が加點されない部分が存する。それは、「大勢至菩薩奉和讃」の八首である。

国宝本「浄土和讃」には、「諸經意彌陀佛和讃」に続いて、「現世ノ利益和讃」「大勢至菩薩」の和讃がある。

これに対して、顕智本は、「大勢至菩薩奉和讃」が先で、「現世利益 十五首」が続き、「別和讃」を添えて終わっている。

そして、顕智本において、先に移された「大勢至菩薩奉和讃八首」には、声点が全く加點されず、左注も一例のみである。

また、国宝本と比べて字句が増補された部分にも声点は加點されていない。ただし、振り仮名は書かれている。

无量壽如来 阿彌陀佛 已上 四十二名 (一七三・四)
さらに、本文が改変された部分にも、声点加點がなされないこ

とがある。

本誓悲願 (四〇四) 如来 (四七三) 十方 (五〇一)
或本 雨行 (六九二) 彌陀 (七四二・八〇一) 廻入 (八
六四) 八首 (一一二〇三)

ただし、一首を増補した「大經意」第十八首には、部分的に声点加點が見られる。

また、次の改変箇所には、声点が加點されている。

如志来 (七五四) 真実信心 (一四三四)

これらのことから、顕智本の声点は、現在の本文に改編される前の本に存した声点を、移点したものではないか、と考えられる。

C. 一音節去声字の割合

国宝本の声点を当該字の『廣韻』四声と比較した結果が、すでに公表されている。

それに基づいて、国宝本『三帖和讃』の声点は、鎌倉時代における吳音声調を反映することが言われている。

国宝本『浄土和讃』と顕智本『浄土和讃』との対応本文について、その漢字に加點された声点を対照させると、大部分一致する。

しかし、若干の異なりが存する。

そのうち、最も多いのは、一音節字における上声と去声との間の相違である。

前接字の声調の影響を排除するために、右の先行研究にならない、語頭の一音節字について、両本の去声と上声との数を数えてみると、結果は、次のとおりであった。(両本における声点加點字は、ほぼ一致している。)

	去声点加点例	上声加点例	計
国宝本	一一(4.6%)	二二七(95.4%)	二三八例(100.0%)
顕智本	四四(19.1%)	一八六(80.9%)	二三〇例(100.0%)

右のとおり、書写の古い国宝本よりも、新しい顕智本の方が一音節字への去声点加点例が多い。

本稿の筆者は、かつて、字音直読資料について、その上声・去声の数を数えてみたことがある。¹⁰⁾次にその数値を引用する(ここでも、直前字の声調の影響を考慮外とするため、調査は句頭の例に限っている)。

① 聖衆来迎寺蔵『妙法蓮華經』院政末期点	一一〇六(頃点)		
② 親鸞筆『阿弥陀經・觀無量壽經』建仁(元久)一一〇一(一一〇六)頃点			
③ 龍谷大学蔵『無量壽經』南北朝期点(右と同時期の親鸞加 点本の移点本)			
④ 龍門文庫蔵『阿弥陀經・觀無量壽經』鎌倉後期点(祖点は 鎌倉初期)			
⑤ 東京大学国語研究室蔵『大般若波羅蜜多經 卷一』建長六 年(一一五三)頃点			
	去声点加点例	上声加点例	計
①	八一(95.3%)	四(4.7%)	八五(100.0%)
②	一〇九(94.8%)	六(5.2%)	一一五(100.0%)

③	二〇八(89.7%)	二四(10.3%)	二三二(100.0%)
④	五七(74.0%)	二〇(26.0%)	七七(100.0%)
⑤	七(15.9%)	三七(84.1%)	四四(100.0%)

このように、一音節去声字の上声化は、字音直読資料では、鎌倉時代に入って顕著となり、鎌倉時代中期にはほぼ完了する。国宝本は、寶治二年(一一四八)と正嘉元年(一一五七)の成立と考えられるため、声点加点時期は、右の⑤東京大学国語研究室蔵『大般若波羅蜜多經 卷一』建長六年(一一五三)頃点とほぼ同時期であろう。

⑤東京大学国語研究室蔵『大般若波羅蜜多經 卷一』建長六年(一一五三)頃点が、比率として、同時代の国宝本『浄土和讃』よりも多く去声点を留めるのは、字音直読資料に、『三帖和讃』のような和語を交えた漢語資料よりも、より規範的な呉音声調が反映されたためであろう。

ここで、正應三年(一一八九)に書写された顕智本『浄土和讃』が、建長六年(一一五三)頃点の『大般若波羅蜜多經 卷一』よりもやや多い比率の去声点加点例を残している事実は、いかに解釈すべきであろうか。

ここまでの検討によって、顕智本の訓点は、親鸞加点点の底本を移点したものであることが明らかになった。(それに、若干の増補・改変を加えている。)

よって、もととした親鸞加点点本に、国宝本よりも古い、あるいはより規範的で字音直読資料に近い加点点がなされていた、と考え

るべきであろう。

四、まとめ

以上、顕智本「浄土和讃」「正像末法和讃」について、国宝本『三帖和讃』との比較によって、次の点が知られた。

1. 顕智本の振り仮名は、親鸞以外の人物によって増補されている。
2. 声点は、基本的には親鸞加本のを写したと考えられる。ただし、形式を改変したものが存する。
3. 顕智本が元にした親鸞加本は、国宝本よりも声点の加筆時期が早かった可能性がある。

注

- (1) 『影印 高田古典「第二巻」顕智上人集 上』(一九九九年、真宗高田派宗務院) 所収「解説」、参照。
- (2) 常磐井和子「三帖和讃の諸本について」(『真宗研究』第三二輯、一九八七年十二月)、参照。
- (3) 注(1)著書所収「解説」、参照。真佛は、国宝本『三帖和讃』の本文の筆者であると推定されている。
- (4) ただし、顕智本では、徹底していない箇所も存する。たとえば、「讃阿弥陀仏偈和讃」第十六首(国宝本二六・顕智本一四ウ)四行目の左注では、国宝本「アミタオハ」(阿弥陀をば)を、顕智本は、「アミタヲハ」とする。

また、同第十八首(国宝本二八・顕智本一五ウ)四行目では、国

宝本「利益衆生ハキワモノシ」を、顕智本は、「利益衆生ワキワモノシ」とする。

- (5) 小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」(『東洋大学大学院紀要』第2集、一九六五年九月)、沼本克明「漢字音に於ける促音の表示法」(『国文学攷』第六十九号、一九七五年十月)後、沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院) 付論第二章に改稿所収。
- (6) 佐々木勇『平安鎌倉時代における日本漢音の研究』(二〇〇九年、汲古書院)九六九・九七〇頁、参照。
- (7) ただし、「法^{ホフ}喜^キ」(二六三)「法^{ホフ}蔵^{ゾウ}」(三四二)「平等^{カウ}覺^{カク}」(二一四)は、国宝本対応箇所では、清の声点が加筆されている。(また、最終二例「種種^{ソウソウ}」(二八三三)・「卜占^{ウラナヒ} 祭祀^{サイジ}」(二七四四)は、国宝本対応箇所の声点加筆が無い)。
- (8) 坂東本『教行信証』・西本願寺蔵『阿弥陀経・観無量壽経註』にも、舌内入声字に「濁緩」の入声点加筆例が存した。しかし、それらは、「一・七・八・日」などであって、今日でも「一チ」と書かれ、読まれ、他の舌内入声字よりも早い時期に、「一チ」の音で開音節化して発音される場合が存したことが推測されるものであった(佐々木勇「親鸞筆『阿弥陀経』『観無量壽経』の漢字音について」(『比治山大学現代文化学部紀要』創刊号、一九九五年三月)。
- (9) 高松政雄「呉音声調——親鸞の場合——」(『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』第二六卷、昭和五三年)。
- (10) 佐々木勇「龍谷大学蔵『無量壽経』の訓点について——定家仮名遣による訓読点と親鸞の字音点——」(『鎌倉時代語研究』第十六輯、一九九三年五月)。